

# 推理小説の主人公

43期生

## I テーマ設定の理由

推理小説に出てくるさまざまな探偵を本で知り、あこがれたことがあり一度探偵を始めとする推理小説の主人公（探偵、刑事、怪盗、殺人者など）の特徴を調べてみたいと思い、このテーマを設定した。

## II 研究方法

- (1)日本の推理小説の主人公について
- (2)ミステリーの殺害方法
- (3)世界の推理小説の主人公について

## III 研究内容

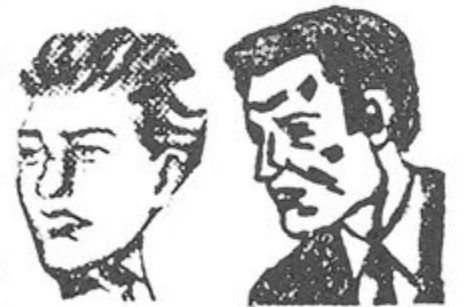
- (1)日本の推理小説の主人公について

・日本のミステリー界を支えてきた主人公の流れ

日本のミステリー界は、江戸川乱歩の作り出した明智小五郎によって歩み始めた。今回僕は探偵を中心に初期・中期・後期の3つに分け傾向をまとめてみた。

・初期

最初に日本のミステリー界を支えてきたのは明智小五郎や金田一耕助を始めとする探偵たちであり、彼らはまさに探偵と呼ぶのにふさわしい人物達であった。これはたぶん外国の推理小説の影響（とくにシャーロック・ホームズやオーギュスト・デュパン）だと考えられる。しかし、外国の推理小説の影響が強すぎて1人の人間ではなく探偵という名の生き物としてさまざまな事件を冷静に、そして、アガサ・クリスティーの作り出したエルキュール・ポワロのいう“灰色の脳細胞”を使い解決していった。推理機械と呼ばれていた、神津恭介もしかり、彼は常に冷静であり、あまりにも冷静でありすぎるためこう呼ばれるようになった。つまり、それだけ謎解きを重視していたのだ。



明智小五郎（左）と鬼貫警部（右）

また、この頃はヨーロッパの影響をうけて、ヨーロッパ的志向が強く、その代表が法水麟太郎（のりみず・りんたろう 小栗虫太郎著）である。

・中期

初期の頃の探偵達（明智小五郎、金田一耕助など）は探偵として事件を解決するための特権を何一つもっていなかった。それに事件に多く出会うことがおかしく感じた。そこで新たに主人公として現れたのが刑事なのである。その代表として鬼貫警部や三原警部補、十津川警部などがいる。かれら刑事たちは初期の頃の探偵と違い1人1人はそれほど推理力はないが警部（警視）を中心とした警察組織（主に捜査一課）全員が一丸となり名探偵の推理より上の「足」を使い事件を解決していった。これは日本の会社組織と共通しているところがある。また、この頃刑事と同じように特権をもっている主人公として検事や弁護士などがいる。例えば前記は赤かぶ検事であり、後記には朝吹里矢子弁護士がいる。この他にもいろいろいるが、弁護士と検事、立場が全く逆だが、今までの主人公と違い逮捕（ときには誤認）により捕まった犯人を法廷に出し、裁判によって有罪（無罪）にするための努力をし、有罪（無罪）にするための証拠品を集めたり、推理を働かせたりする。これを法廷小説と呼び、犯人の特徴や心理状態がよくわかる。これらの中期の主人公たちは初期と違い派手さはないが、一步一步堅実な捜査を行い確実に事件を解決していった。

・後期

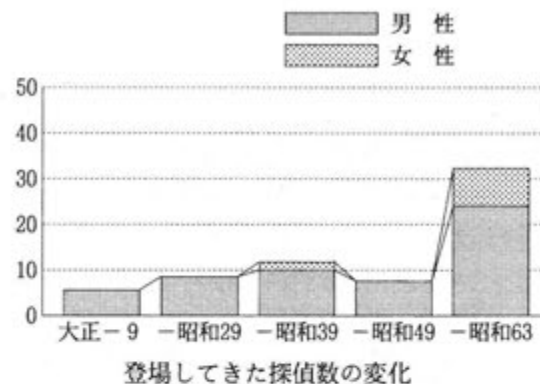
後期になり、警察の科学技術が進歩していき、髪の毛1本、指紋1個や声紋などだけで犯人がわかるようになった。そのために、初期の頃の探偵たちはどんどん必要性がなくなっていき出てこなくなった。また、刑事などの中期の主人公は堅実な捜査を行い確実に事件を解決していったが地味すぎて、個性がなさすぎた。そのため後期になり、さまざまな謎解きや事件の内容とともに小説としての面白さ、主人公のキャラクター性が求められてきた。例えば、山村正夫の造り出した滝連太郎は名前から連想されるのは有名な作曲家のようなスマートなイメージだが、実物は大違いで2メートルはあろうかという海豹のような巨体、ふくれたパンのような愛嬌のある童顔に小さな目と団子っ鼻。あごの下のカストロ髭もなんともしまらない。そんな容姿で頭に浮かびやすい。彼はおどおどしい事件を中心に解決していった。土佐美郷（とさみさと）、織田貞夫（おださだお）この2人を逆さから呼んでみると……。彼らは山本山コンビと呼ばれ岡嶋二人の作品に登場している。2人は凸凹コンビで145cmの突進型的美郷と彼女を押さえる183cm 2mmの貞夫。この2人はキャラクター性の強い探偵の典型である。赤川次郎の三毛猫ホームズ、辻真先の迷犬ルパン。この2人？は人間顔負けの名推理で飼い主の刑事よりも警察に信用されている。2匹は2度ほど共演している。こういう不思議な探偵や女性の探偵はこの頃から出てきた。

・今後

初期から後期を見て今後の探偵の傾向を考えようとしていたが、後期の探偵を見て全く予想できなくなった。なぜなら、後期になりさまざまな種類の探偵が出てきて共通点がなくなり今後どんな探偵が現れても不思議ではないからである。また、探偵の数が増えるのは次のページのグラフから間違いないと考えられる。そして、男女比については女性の割合が増えるだろう。本格派の探偵は減り、後期と同じようにさまざまなキャラクターをもつ探偵が出てくると考えられる。何故ならなんにしても推理作家が知恵を絞って今までにない探偵を作りだそうと努力するだろうと予想されるからである。まさに、赤ちゃんからお年寄りまで探偵になる、というそんな時代になるのではないだろうか。

・年代ごとの探偵たち（64人）

今までは、日本の探偵たちをおおまかに、初期、中期、後期とわけてそれぞれの傾向について調べたが、ここでは年代ごとに大正から昭和の探偵を何人か挙げたいと思う。右の図では大正から昭和19年をひとまとまりとしているが、大正時代の探偵はただ一人、日本の名探偵明智小五郎である。昭和にはいり外国の推理小説の影響を受けて登場してきた一人が海野十三の帆村莊六である。名前からしてシャーロック・ホームズのもじりで、



影響を強く受けたことがわかる。第二次世界大戦を挟み、昭和20、30年になると先程の前期と中期の探偵が半々ぐらいにわかる。例えば初期の代表として明智小五郎と並び賞される金田一耕助や推理機械と呼ばれた神津恭介などであり、中期は鬼貫警部や三原警部補である。また、30年代には後期の先駆けともいえ、先程の山本山コンビと通じる所がある仁木雄太郎・悦子兄妹がいる。この探偵には作者である仁木悦子さんが足が不自由だった自分の変わりに思う存分動いてもらいたいという願いが込められている。40年代は20、30年代に探偵が多く登場してきた影響で少なかったのだと考えられる。また、この年代は中期と後期の探偵がでてきた。50年代になり探偵数は一気に伸びてきた。そして、多くが後期の種類の探偵になってきた。三毛猫ホームズや山本山コンビがよい例である。

以上が年代ごとの探偵についてまとめたものだが、上の説明を見てわかるように、初期と中期または中期と後期というように、同年代で三つの傾向の中の二つにわかることが多くて区切りなどがわかりにくい。

・ミステリーにおける殺害方法

ミステリーにつきものなのが殺人で、これは影の主人公ともいえる犯罪者が行う。左のデータは1作家1作品として60作の長編を選んだものだが、一篇平均2.6人死んでいる。そして殺害方法としては毒殺（とくに青酸カリ）が多く2割が毒殺により殺される。これは海外に比べて多い割合である。日本人が毒殺好きなのは何故かという原因としてはいくつか考えられる。例えば、日本では銃を禁止されているために射殺が1割程度しかないことや、青酸カリなどは作用が速やかで効果的であり、食べ物に混ぜることができて、犯人が現場にいなくても殺害できるからアリバイなど計画を練りやすい。この計画



殺害方法について

を練るといのが日本人の神経質な性格にあっていのだと思う。他の殺害方法についてだが左の上のデータの中には意味がよくわからない方法もあると思うがここでは都合上、省かせてもらう。



▲ホームズの横顔



著者コナン・ドイル (1891年)

・ホームズの知識

1 文学…ゼロ 2 哲学…ゼロ 3 天文学…ゼロ 4 政治…  
 わずか 5 植物学…園芸については無知だがアヘンなどの毒物に詳しい 6 地質学…実際の知識豊富 7 化学…  
 豊富 8 解剖学…詳しいが部分的 9 大衆文学…豊富  
 10 ヴァイオリン…巧みに演奏できる 11 棒術・拳闘・柔道・フェンシング…達人 12 英国憲法…実用知識豊富

シャーロック

=ホームズ

(アーサー・コナン・ドイル)

いわずと知れた世界一の名探偵。体は細身だが、背は180cm以上あり、射るようなすどい眼をもち、鼻は肉のうすい鷲のようで、全体の風貌は俊敏果敢な印象を与える。また、ぐっと角ばったあごは決断力と意志の強さを示す。

ホームズは1854年、イングランド・ヨークシャー州ライディングのマイクロフト農場で生まれた。オックスフォード大学在学中に20歳にして《グロリア・スコット号 (1874年7月12日～9月22日)》を手

がけ、卒業後、1877年に世界初のコンサルタント探偵を開業、その後23年にわたりこの仕事に従事した。彼の親友であるジョン・H・ワトソンに出会ったのは1881年(《緋色の研究》からコンビを組む)でその後ワトソンがさまざまな事件を記録するようになる。ワトソンが事件を記述してくれていたおかげで我々が知ることができたのである。ワトソンについて触れておくと、1852年生まれ(ホームズより2つ年上であった。)アフガン戦争の負傷者である。親切で温かく、誠実で勇敢、義侠心に富み、情熱的で女性に弱いハンサムな紳士という雰囲気ホームズを一層くっきりと浮き彫りにする効果がある。再びホームズの話に戻るが、ホームズの生活に関してはワトソンより早く起き10時までにはたいてい寝ていた。しかし、だらしなさは人並みはずれていた。ときには家中で射撃の練習をすることもあった。そんなホームズ

についてワトソンは《緋色の研究》で左のように彼の脳を解剖している。この後1、2、3についてはかなり詳しいということがわかる。

ホームズのすばらしさは僕には説明しきれないので本を読むことをすすめる。

アルセーヌ

=ルパン

(モーリス・ルブラン)

ホームズが名探偵の代名詞なら、このアルセーヌ=ルパンは怪盗の代名詞である。ルパンが怪盗になった動機は父が詐欺事件で獄死したため母が社会からひどい仕打ちを受けて苦勞したことの義憤である。

怪盗となったルパンが盗むものは悪どい金持ちや汚職政治家の美術品ばかりである。しかも、盗むことを前もって盗む時間までも予告して厳重な警戒の中を大胆不敵な方法でまんまと失敬する。

そんなルパンは当時フランス一の人気者であった。それは彼が怪盗である前に紳士だったからである。貧しい人や善良な市民からは盗みをしないし、常に弱い者の味方で、女性を尊敬し、その名誉をまもる騎士道精神がフランス国民の人気を得ている一因である。また彼はスポーツ万能で、とくにルパンの柔道は名人級である。そんなルパンには、暗い過去がある。一人目の妻が病死、二人目は殺され、三人目は修道院に入って尼になっている。

ルパンは晩年田舎に引きこもってバラの栽培をしながら静かに余生を送ったという。

・ルパンの変装について

ルパンの一番の特技はなんといっても変装である。彼はなんと49人もの人物に変装している。自分の真の姿がわからなくなるのもうなずける。ここでは変装した人物の何人かを紹介したいと思う。

・ラウル・ダンドレジー子爵

ダンドレジーはアルセーヌ・ルパンの母親の名字、6歳のときに女王の首飾りを盗みだすという最初の窃盗をしたときにすでにこの名を使っている。

・アルセーヌ1世……モリタニアの皇帝、アドラールの君主

・ジム・バーネット……私立探偵 ・ドラングル……国家警察部の警部

以上の他にさまざまな人物に変装し人々の目を欺いた。



▲アルセーヌ・リュパン



▲モーリス・ルブラン

#### ・推理小説の起源

推理小説の起源については、さまざまな説がある。たとえば、『旧約聖書』の外典には近代の推理小説の原型ともいえる「ベルの話」というのがおさめられている。この話の内容はバビロニア人があがめていたベルという偶像に毎日そなえられるおびたしい食物と酒が、そのつど消えてなくなった。(祭司たちが祭壇の下に秘密の入り口をこしらえ、そこから出入りして、飲み食いしていた。)そこで、預言者のダニエルが神殿内にくまなく灰をばらまき、そこに祭司たちの足あとが翌日に残っていて犯行がばれるというものである。他には『イソップ物語』のなかの「シシとキツネ」、アルキメデスの逸話、フランスの作家ヴォルテール(1694~1778)の小説『ザディグ』の第三章「犬と馬」にも推理小説の原型と考えられるものがある。しかし、これらの物語は、推理をあつかっているが、あくまでも断片的なものであり、ほんとうの意味での推理小説とはいえない。では、はじめて本格的な推理小説を書いたのはというと江戸川乱歩の名の由来になっている、エドガー＝アラン＝ポーで「モルグ街の殺人」がその第一作である。

以上が推理小説の起源ということになる。

#### IV 結論

僕は今回一つの大きなテーマとして、日本の探偵の特徴をまとめようというものがあつたが調べているうちに無理に決まっているということに気づいた。それは一人一人の探偵には、それぞれ独自の個性というものがあつて、その個性を上げるために何十人もの作家はそれぞれに苦心して工夫を加えるのである。このことに、僕は作家の主人公への思い入れが強いことを改めて実感した。しかし、その中でも最近はとくにキャラクター性が重視されるようになり、中学生探偵も出てきそうである。

#### V 総括

今回は3年間の中で初めて興味よりも好きだからということでテーマを決定したが、それによって研究がはかどったと思う。また、資料集めが大半だったが、思ったような資料(とくに世界の探偵について)が集まらず、逆に余分とも思われるほどの資料を集めたが全部を読むことができなかつたのが残念である。

#### VI 参考文献

- |                        |                          |       |             |
|------------------------|--------------------------|-------|-------------|
| 『昭和の名作名探偵』             | 新潮社編                     | 新潮社   | 1990年       |
| 『推理百貨店本館』              | 新保博之                     | 冬樹社   | 1989年       |
| 『推理百貨店別館』              | 新保博之                     | 冬樹社   | 1989年       |
| 『アルセーヌ・リュバン 一怪盗紳士の肖像一』 | ジャン＝クロード・ラミ              | 大友徳明訳 | 東京創元社 1986年 |
| 『シャーロック・ホームズ原画大全集』     | ジョン・ベネット・ショー、小林 司、東山あかね編 | 講談社   |             |

他何冊から何百、何千冊に至る推理小説(僕が今まで読んだ本)